



Osaka Gakuin University Repository

Title	柴田鳩翁の「道話」における禁欲主義心学－石門心学の思想的変容と退潮－ Kyo Shibata's Stoic Shingaku in his "Dowa"s – The Philosophical Changes in Sekimon Shingaku and the Decline of the Shingaku –
Author(s)	森田 健司 (Kenji Morita)
Citation	大阪学院大学 経済論集 (THE OSAKA GAKUIN REVIEW OF ECONOMICS), 第 25 巻第 1 号 : 67-96
Issue Date	2011.06.30
Resource Type	ARTICLE/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

柴田鳩翁の「道話」における禁欲主義心学 －石門心学の思想的変容と退潮－

森 田 健 司

要 旨

全国に普及し、確かに一時代を築いた石門心学は、江戸期の終わりと共に思想の表舞台からその名を消してしまった学派でもある。近代の壁を突破できなかった後期石門心学には、一体如何なる思想的限界が存したのか。本論考においては、柴田鳩翁の思想を石門心学史の中で検討することによって、学派衰退の理由を考察したい。

講釈の達人であった鳩翁は、中沢道二が完成させた「道話」を更に洗練させた心学者としても知られている。この「道話」に込められた彼の哲学は、端的に表現すると禁欲主義に他ならなかった。石門心学にはその誕生以来、禁欲主義的傾向が強くあったが、鳩翁のそれに関する最大の問題は、理性の働きに制限を掛けてしまうことにあったといえよう。簡易化され、個の精神を束縛する、現状追認の禁欲主義に変容した心学は、まさにその理由に因って、近世と運命を共にするしかなかったのである。

キーワード：経済倫理、石門心学、社会思想

JEL分類番号：B19; Z12

1. 衰退する石門心学

思想の世界に限定した場合、学派というものの命脈が尽きるのは、一体如何なる時と考えられようか。権力による抑圧や、人間関係の破綻といった外部的要因を除けば、その多くは、当該学派の掲げる思想が時代と共鳴することを止めてしまった時か、あるいは、それが独自の進化や発展を止めてしまった時ということになるだろう。

石田梅岩(1685～1744年/貞享2～延享元年)によって創始された石門心学は、疑うところなく、一つの学派として一時代を画すまでの存在となった。しかし、江戸時代が終わると同時に、思想界の中からその名をほぼ完全に消失してしまった学派でもある。現実の生に寄り添った哲学として、全国で、更には階級の別をも超えて多くの支持者を獲得した石門心学が、近世という時代の壁を突破できなかった理由は果たして何であろうか。本論考は、近代性を胚胎していた石門心学が、何故幕末に斃れたのか、後期石門心学を代表する論者・柴田鳩翁(1783～1839年/天明3～天保10年)の思想を検討することによって、解き明かさんとするものである。

鳩翁の言説を考察する前に、まずは、学派としての石門心学の衰退期を大まかに見定める作業から始めよう。石川謙は、講舎の数から教化の内実に至るまで、膨大な資料に基づき検討を施した上で、次のように結論付けている。

天保元年より慶応三年に至る三十八年間の教勢趨移の跡を見ると、個人としては優秀な心学者もあり部分としては隆盛を極めた地方や新開拓の地方やもあったが、大勢の上からは衰退の一路を辿つたものと断ずるの外はない¹⁾。

1) 石川謙著『石門心学史の研究』(岩波書店・1938年)、p.767。なお、石川による心学の時代区分がその根拠としているのは、主に布教国と心学舎の数の推移であり、その意味で極めて高い客観性を担保している。

石門心学が衰退を始めた理由の第一として、石川は、総本家というべき手島家が、この期間中に優れた心学者を輩出しなかったことを挙げているが、確かに強力な指導者を欠いたが為に、学派としての石門心学の勢いが殺がれてしまったことは否めまい。これは上に述べた、学派衰退の外部的要因の一つである。これに付随する問題ともいえようが、十分な修行を経ず、ただ話上手なだけの心学者が多く現われたことも、石門心学に対する信用を落とせしめる原因となった²⁾。しかし同時に、この類の心学者の出現が、偏に強力な指導者が途絶えた事実にもみえ、注意しておく必要があろう。

1830年(天保元年)を衰退期の始まりとして石門心学を眺めれば、そこには一つの際立った特質が浮かび上がる。この時期、石門心学の講舎で人気のあった講釈方法は、道話を用いたものであった。道話は、手島堵庵(1718~1786年/享保3~天明6年)が先鞭を着け、中沢道二(1725~1803年/享保10~享和3年)が完成させた形式である。それを大まかに説明するとすれば、難解で複雑な経書や仏典の言葉を、日常的な出来事や譬え話を題材に、親しみのある言葉で語り直したものとなろうか。ただし、堵庵や道二による道話の使用は、心学思想の簡易化とは全く違うものであったと知る必要がある³⁾。

一切の経文一切の書物は、我本心を知る所書じや。明德を明らかにせんが為の楷梯じや。屋宇へ昇るに楷梯でなければ昇られぬ。屋宇へ昇たれば楷梯はモウいらぬ。夫に屋宇の上で長い楷梯をぶらぶらふり廻して、あぶない事じや。怪我人が出来ると言ふも聞ず、鼻ばかりたかうして、子曰く、何屋何兵

2) 同書、p. 774。

3) 次に挙げる拙論二編を参照。「石門心学史における手島堵庵の思想的位相—外形的制約からの決別と『本心』—」、『大阪学院大学経済論集 第24巻第1号』(2010年)所収。「中沢道二の「道話」哲学にみる存在論的転回—石門心学隆盛の時代とその真因—」、『大阪学院大学経済論集 第24巻第2号』(2010年)所収。

衛何屋何兵衛。所書ばかり読んでゐる。そのかたはきでは釈迦如来が強い、阿弥陀様が勝じやのと、自慢するを、神道者は聞て、あら勿体なや、我神国を汚す夷狄の法、払い給へ清めて給へ。と鈴振り立る。又一方では、法華は箒でたゝかれる。門徒は門を鎖められた。浄土は錠をおろされたと、名ばかりでせり合いしてゐる⁴⁾。

ここに引いた道二の言は、道話という講釈方法に込められた理念のみならず、石門心学の立ち位置をも明確にいい表したものと見える。石門心学にとって、古今東西、様々な偉人によって著された書物は、ただ本心を知る為の手引きであり、真理に近づく為の補助に過ぎない。よって、一旦本心を知り、明德を得たならば、書物とそれに付随する権威は、全く以って不要なものとなろう。しかしながら、現実の世界では、書物こそを後生大事に守り、学問の機能を蔑ろにするという、主客転倒と呼ぶべき事態が多々みられる。道二が道話という形式を用いて講釈を行なった理由は、何より心学とは実学であると考え、同時に、難解な言葉とそれによってもたらされる権威は、百害あって一利なしと捉えていたが為である。

『道二翁道話』にあらわれたかれの哲学をみるに、まず、道二がたえず「生きた学問」をもとめていたことを、なによりも注目しなければならない。道二の心学が世間にひろく行なわれたゆえんも、それが「生きた学問」を説くがゆえであったにちがいない⁵⁾。

よって、もし道話によって経書や仏典の内容自体が改変されていたとすれば、

4) 石川謙校訂『道二翁道話』(岩波書店・1935年)所収、p. 107。引用に際して、旧漢字などを、現代的表記に改めた箇所がある(以降の引用もこれに同じ)。

5) 竹中靖一著『石門心学の経済思想 増補版』(ミネルヴァ書房・1972年)、p. 556。

それは道話の理念から大きく外れてしまう行いとなろう。道話とは飽くまで、聴き手にとって解し易い言葉で語り、「生きた学問」として受け取ってもらう為の方法であって、内容自体の簡易化とは本質的に異なるものなのである。

それでは、石門心学が衰退しつつあったとされる時期に活躍した、柴田鳩翁は如何なる思想を育み、如何なる形式で講釈を行なったのであろうか。講釈方法からいうならば、彼は心学講師として、一貫して道話をを用い続けた。彼の道話の聞書である『鳩翁道話』は、石門心学に関する書物の中で、最も多く翻刻され、最も多く読まれた一冊とさえいわれている⁶⁾。しかし、それを以って、鳩翁の道話、引いては思想自体が、高く評価されているとするのには無理が存しよう。事実、『日本思想史辞典』には、次のような記述がみられる。

鳩翁が＜道話＞の対象とした人々は農民や町人という庶民たちであったが、名声の高まりとともに武家や公家の関心を引き、いくつかの藩から領民教化のために招聘されるなど、為政者の積極的後援をうけた。その意味では、彼の＜道話＞には体制の支配の具に供された側面もあったといわねばならないだろう⁷⁾。

時の為政者から支援を受けたという事実のみによって、体制に迎合的な思想であると断じるのは、明らかに難のある議論である。例えば、道二を例に考えるなら、多くの武士たちが彼に師事し、また経済的援助を申し出たが、それは彼の思想と体制を支える精神に親和性があった為ではない。むしろ、彼の思想には、四民の別を前提とした武士階級の支配を、本質的には無効化してしまう

6) 同書、p. 641。

7) 山本眞功「柴田鳩翁」、子安宣邦監修『日本思想史辞典』（ペリカン社・2001年）所収、p. 238。

ような因子すらあった⁸⁾。それでも道二の思想が武士から多くの支持を集めたのは、彼の教説が、人の私的領域に切り込み、それを確かに下支えする性質のものであったがゆえ、である。換言するならば、道二思想の支持者は、身分や職分を脱ぎ捨てた、裸の「個」であった。

もちろん、道二の思想が上のような性質を持つものであったからといって、即、鳩翁も同様であろうと推察することはできない。竹中靖一は、鳩翁の思想に関して、その時代背景と絡ませ、次のように描いている。

幕藩体制の社会的経済的な矛盾が、一時に露呈して、物価は高騰し、人心は、世相不安におののいていた。だから、鳩翁は、いっそう、教化の必要を痛感したことであろう。しかし、陰悪な世相をうけとったかれの態度は、小心翼翼とした庶民の立場をでなかった。幕藩体制の変革などということは、およそ、鳩翁の考えるところではなかった。だから、代官や藩の当局が、安んじて、かれに領内教化をゆだね、為政者の積極的後援があったから、鳩翁は、教化活動に多くの便宜をえたのである⁹⁾。

天保年間とは、1833年(天保4年)から1836年(天保7年)にかけて発生した大飢饉をはじめとして、社会全体が大きな不安に陥り、混乱に巻き込まれた時代であった。1837年(天保8年)には、大坂において大塩中斎(1793～1837年/寛政5～天保8年)の叛乱も起き、これは単なる武装蜂起として以上に、「万物一体の仁」を掲げる日本陽明学の峻厳なる思想的態度が表明された点においてこそ、重要な歴史的イベントとして記憶されることとなった¹⁰⁾。

8) 前掲「中沢道二の「道話」哲学にみる存在論的転回—石門心学隆盛の時代とその真因—」、pp. 105-106。

9) 前掲『石門心学の経済思想 増補版』、p. 650。

10) 拙論「江戸後期における陽明学と武士道の連関—大塩中斎・山田方谷・河井継之助—」、『大阪学院大学経済論集 第22巻第2号』(2008年)所収、pp. 77-94。

この中斎の乱にも実際に遭遇し、何とか生き延びた鳩翁は、陽明学に対して如何なる思いを抱いたのであろうか。そして、竹中の「小心翼翼とした庶民の立場をでなかった」という鳩翁への評価は、一体如何なる理由に基づくのか。現在の学界において決して高い思想的評価を得ていない鳩翁であるが、これに関しては、堵庵や道二の例のように、内在性に欠いた批判が大勢を占めているという可能性も、当然のことながらあり得よう。よって以下、鳩翁の思想に関して、「梅岩—堵庵—道二」と受け継がれてきた石門心学の正統を踏まえつつ、考察してみたい。

2. 鳩翁の人生と道話

思想を検討する為には、思想家本人の言葉を検討するのが最も適切であろうが、その為に前提となるのが、当人の人生に関する大まかな情報である。より厳密にいうならば、思想家の個人的環境と、それを包む社会的環境となろうか。よって、まずは柴田鳩翁という人物の生きた様を、簡潔に整理してみたい¹¹⁾。

後に「道話の神様」とも賞されることとなる柴田鳩翁は、名を亨、通称が謙蔵、幼名は吉五郎といい、最も知られる鳩翁以外には、鳩継庵とも号した。生年は1783年(天明3年)であり、これは石門心学の創始者である梅岩の誕生より、約一世紀後のことである。京都は堺町姉小路上ル町にて、代々飛脚業を営んでいた奈良物屋吉兵衛の子として誕生した鳩翁は、幼少時より経済的苦境に苛まれ続けた。彼にとっての最初の困難は、1788年(天明8年)に発生した、いわゆる「天明の大火」によってもたらされることになる。当時の京都市街地の

11) 道二の人生に関しては、柴田寅三郎編『鳩翁遺稿』（刀江書院・1929年）、『石川謙校訂『鳩翁道話』（岩波書店・1935年）、石川謙著『石門心学史の研究』（岩波書店・1938年）、竹中靖一著『石門心学の経済思想 増補版』（ミネルヴァ書房・1972年）、前掲『日本思想史辞典』などを参考とした。

約八割を焼いたという大火に伴い、幼かった鳩翁は、父母と共に丹波にあった母の実家に約一年間身を寄せている。京都に戻ってからは、厳しい経済状況が続く中で、病弱な身に鞭打って働く父や母をみながら、立身を心に誓い日々を過ごした。しかし運命は残酷であり、11歳にして呉服屋に丁稚奉公に出るものの、16歳で父を、次の年に母を相次いで失い、若くして孤独な身の上となってしまったのである。

両親を失いながらも、社会的な成功を遂げようとする意志は潰えることがなかった鳩翁は、主家を辞して京の地で転々とするが、結局のところ何一つ為し得ず、1801年(享和元年)には新天地・江戸に向かうことになる。しかし、江戸の地でも身を立てることがかなわず、7年間の極貧生活を経た後、京の地に戻ったという。この間に身に付けたのは塗師としての技術で、これによって余裕はないながらも、ある程度は安定した生活を手に入れ、妻を迎えるに至った。ここまで、殆ど学問というものと縁がなかった鳩翁が、一大転機を迎えるのが、齢28の時のことである。偶然に聴いた軍書講談が、彼の人生を一変させてしまうのであった。ただし、鳩翁は軍書講談の内容に惹かれた訳ではない。彼が関心を示したのは、講談師という仕事の方であり、この程度ならば自分にも可能ではないか、そう思ったと後に述懐している。

講談師として再出発した鳩翁は、すぐさま多くの聴衆に恵まれ、この道における才能の高さを証明することとなった。初めは丹波の弓削村において、『赤穂記』に基づく講談を行い、眉山と名乗り始めてからは、京都の寺院などでも興行を催すようになったという。なお、この講談師としての尋常ならざる能力の高さは、鳩翁心学の美点でもあり、後に論ずるように、その限界に繋がる要素ともなる。日々、講談師として名を上げていく彼であったが、それに溺れることなく、詩作を学んだり、30代の半ばを過ぎてからは、儒学書の独学したりと、一貫して自己の鍛錬を怠ることがなかった。結果、最盛期には年に百両近い収入があったという。この講談師・眉山が石門心学と出合うのは、時習舎の

前川常営を介してであった。心学の門をくぐる直接の契機となったのは、梅岩の『都鄙問答』を読んだこととも伝えられているが、これは儒学に傾倒した者にとっても、同書の内容が鋭く感じられたことの、一つの証明となろう。

幸に先師石田先生、おひろめなされた心学は、無学文盲でも、出来る学文ぢや。一たび本心を、見つけますと、生れ付に、無理のない事を、しります。此無理のない心を手本にして、物ごとをいたしますれば、身分相応の働きが出来て、人なみなみの人に成りまする、ドウゾお手よりで御修行をなされて下さりませ。かく申せばとて文字は、いらぬと申すのではござりませぬ。行うて余力あるときは、以て文を学ぶとも見えますれば、御隙のある方は、なるだけ書物をおよみなさるが宜しい¹²⁾。

上に引いた言葉は、『鳩翁道話』に収録されたものであり、鳩翁が心学講師になった後に発せられたものであるが、少なくともこれを読めば、彼が梅岩の著作の中に、経書に劣らぬ学識や、高い格調を感じ取り、それに惹かれたのではないことが解される。むしろ衛学的な在り方を拒絶し、実学的であらんとした様こそ、鳩翁にとって魅力があったのであろう。なお、上記引用文は、経書や仏典を読むことが無意味であると述べるものではなく、「学問の為の学問」に対する空しさを説いたものである。最後の文をみればわかる通り、鳩翁は通常の読書自体は、意義が深いものとの見解を示している。

1821年(文政4年)に、時習舎の薩埵徳軒(1778～1836年/安永7～天保7年)に入門して後、心学の修行を五年間行なった鳩翁は、大変な収入を得ていた講談師の仕事に完全に廃し、心学教化に専念することを決意する。1826年(文政9年)に、明倫舎より三舎印鑑を受け、一流の心学講師となった彼は、以後15

12) 前掲『鳩翁道話』、p. 119。

年、つまり1839年(天保10年)に没するまで、精力的な教化活動を続けた。教化の為に訪れたのは、実に12ヶ国に及んでいるが¹³⁾、驚くべきは、彼が心学講師を始めた翌々年である1827年(文政10年)に、完全に失明してしまっていることである。しかし、この身体的な障害は、彼の学的探求を阻害するどころか、むしろ、そののみに関していえば、禍を転じて福と為したかのような印象すらある。

中年になって、たちまちに失明した鳩翁の不自由さは、想像にあまりあるが、かえって、眼中の眼、すなわち、心眼はいよいよさえて、別天地が開け、常人のおよびもつかない自由自在な道話が生まれたのである¹⁴⁾。

失明した翌年に、剃髪し、ここにおいて遂に鳩翁、あるいは鳩継庵と称するようになった彼の心学は、目が捉える浮世を超え、心眼によって捉えられた真なる理に基づくものとでも表現すべきものとなった。道話は、いうまでもなく言葉によって説かれるものであるが、視覚を欠落させていた彼のそれは、まさしく言語情報のみで完結するものであり、鳩翁心学の解し易さ、親しみ易さは、彼の瀕していた困難にこそ起因するとさえいってよからう。

鳩翁の講釈方法は、繰り返し述べた通り、道話を用いたものである。そして、他ならぬこの道話によって、彼は後世にまで名を残すことになるのであった。長く講談師として話術を磨いた鳩翁は、その技術を心学の講席においても、最大限に活用した。わかり易さのみならず、エンターテインメント性こそが、鳩翁の道話の特長であり、人気の秘密であった。竹中靖一は、彼の道話をまとめた『鳩翁道話』の性質を、次のように簡明にまとめている。

13) ここでいう12ヶ国とは、丹後、丹波、越前、摂津、山城、播磨、近江、和泉、伊勢、大和、伊賀、美作を指す。よって、鳩翁の活動区域は、主に関西地方であると理解できる。

14) 前掲『石門心学の経済思想 増補版』、p. 647。

この書のいちじるしい特徴は、經典の説明よりも、事蹟談、寓話、軽口咄、例話などが、はるかに多いことである。（中略）なかならず、事蹟談にもっとも力がそそがれ、配するに、寓話や例話をもってして、事実からくる感銘をつよくし、また、軽口咄も随所に入れて、退屈せしめない。とくに、深刻な事蹟談がながくつづく個所などには、かならず、軽口咄や寓話をさしはさんで、話をやわらげている。しかも、全体にわたって、はなしぶりは、まったく妙をえており、軍書講談の前歴をしのばせるにじゅうぶんである¹⁵⁾。

この巧みな道話によって、鳩翁は多くの熱心な聴衆を獲得していくのであるが、その勢いは1830年(天保元年)を石門心学衰退期の始まりと規定する石川謙にあっても、次のように指摘するほどであった。

既に教勢の統一を失ひ最早衰退の逆境に入つた幕末期の心学界にあつては、一世を統率して立つた心学者を求めることが出来ない。或る意味から言へば当年の心学者は凡べて、地方的存在であつたに過ぎぬ。然し、衰へ行く大勢の中にあつて教勢上の失地回復、新領地開拓に努力貢献した著名な代表者を挙げると、京都に柴田鳩翁、その義子遊翁、江戸に中村徳水、廣島に矢口来應・奥田頼杖、松山（伊予）に近藤平格があつて、各々一方の雄と称するに足りた¹⁶⁾。

石門心学の総本山は、ここで繰り返すまでもなく京都である。その地に現われた鳩翁は、講席の評判も極めて高く、しかも京都を中心に周辺の他国においても、精力的な教化活動を行なっていた。しかしそのことは逆に、一つの大きな疑問を生じさせずにはまい。これほどの心学講師が出現しながら、何故石

15) 同書、pp. 641-642。

16) 前掲『石門心学史の研究』、p. 821。

門心学は衰退していく運命に抗うことがかなわなかったのか。このことを解明するには、生き様や足跡を踏まえた上で、鳩翁の思想内容自体に立ち入って考察を行う必要があるだろう。

3. 鳩翁の禁欲主義心学

既に何度か書名を挙げている『鳩翁道話』は、柴田鳩翁が行なった講席を、継子である柴田遊翁が聞き書きし、編集したものである。原書は9巻に分かれており、『鳩翁道話』と題された3巻が1835年(天保6年)、『続鳩翁道話』全3巻が1836年(天保7年)、『続々鳩翁道話』全3巻が1838年(天保9年)に刊行されている。現在『鳩翁道話』と呼ばれているのは、上記3書全9巻に加えて、1929年(昭和4年)に出版された『鳩翁道話拾遺』全2篇である。鳩翁最盛期の講話が数多く掲載された『鳩翁道話』は、彼の思想を知る為の、格好の資料といえよう。

石門心学は、梅岩によって創始されて以来、教化を何よりも重視してきたが、『鳩翁道話』の冒頭に記された次の言葉は、その伝統がわかり易く表出したものと捉えることができる。

心学道話は、識者のために設けました事ではござりませぬ。ただ家業に追はれて隙のない。御百姓や町人衆へ、聖人の道ある事を御知らせ申したいと、先師の志でござりまする故、随分詞をひらたうして、譬を取り、或はおとし話をいたして、理に近い事は神道でも仏道でも、何でもかでも取込んで、御話し申します。かならず軽口話の様など、御笑ひ下されな。これは本意ではござらねども、ただ通じ安いやうに申すのでござります¹⁷⁾。

17) 前掲『鳩翁道話』、pp. 25-26。

一部の特権階級を除くと、日常的に学的鍛錬を行った上で、専門的な講義を聴いたり、専門的な書を読みこなすことは、時間的に不可能な業といってよい。特に、石門心学が主な対象とした町人は、日々家業に打ち込んでおり、彼らに継続的な学究生活を送ってもらうことは到底望めない。鳩翁の道話は、そのような学問に疎い人々にとっても、必ず理解できるような平易な言葉で説かれている。

また、上記引用文には、「理に近い事は神道でも仏道でも、何でもかでも取込んで、御話し申します」とあるが、特定の思想や宗教に拘ることを是としないうのも、石門心学の伝統的な姿勢である。しかしこれは、様々な思想や宗教に精通しなければ、石門心学のいう理に到達できない、という意味ではない。

石門心学を理解しようとする場合、肝心な事は、思想体系を構築するにあたって、何を素材に栄養として摂取したのか、にあるのではない。そうではなくして、既成の思想的遺産を摂取して独自の体系を樹立する際に、その摂取し樹立する主体者（心）を確立する、そのような視点を、何を契機にして発見したのかということである。結果として、石門心学を獲得した後に発言された表現のなかに、そのことを告白した証言を具体的に指摘できるか否かは、さしあたり問題にはならない¹⁸⁾。

ここに引いた吉田公平の解説には、石門心学の雑種性の本質が示されている。重要なのは、梅岩のいう性を、あるいは堵庵のいう本心を、「何を契機にして発見したのか」であり、様々な思想や宗教は契機以上のものではなく、肝要なのは結果のみと知らねばならない。

18) 吉田公平「石門心学与陽明学」、今井淳・山本真功編『石門心学の思想』（ぺりかん社・2006年）所収、p.386。

『鳩翁道話』の第一巻は、孟子のいうところの「仁人心也。義人路也」の意味を平易に解説するところから始められているが、これは鳩翁思想の核心を開示した部分と捉えてよかろう。まずは、仁に関する説明からみてみたい。

時に仁と申す事は、畢竟トント無理のないと申すことでござります。此無理のないのが、即ち人の心ちやと、孟子は仰せられました。此無理のない心を以て、親に仕へますと孝行となり、主に仕へますと忠になり、夫婦兄弟朋友の間も又々此通りで、五倫の道はやすらかに調ひます。其無理のない仕様は、親は親のあるべきやう、子は子のあるべきやう、夫は夫のあるべきやう、女房は女房のあるべきやう、此有る可きやうが無理のないところで、即ち仁なり、又人の心でござります¹⁹⁾。

仁とは、すなわち無理がないことを意味するというのは、なかなかすぐには解しがたい物言いではある。しかし、可能な限り文脈に即して考えてみると、無理のないこと、「あるべきよう」を心掛けて人に接すれば、そこに孝行や忠が生じ、五倫の道も調うというのであるから、意味の確定は難しくとも、結果的にいえば、無理のない在り様を心掛けると、それが仁に直結するというのは理解できない話でもない。では、「あるべきよう」とは何か。もう少し、鳩翁の説明を追ってみたい。

もしあなた方が親御へ口ごたへをなされたり、また親を泣かせたり、主人に心配させたり、難儀をかけたり、夫に腹を立てさせたり、女房に心づかいをかけたり、弟を悪んだり、兄を侮つたりを世間へ難儀を懸け散らすは、皆扇で尻を拭ひ、見台を枕にしてござるといふものぢや²⁰⁾。

19) 前掲『鳩翁道話』、p. 26。

20) 同書、pp. 26-27。

ここで表明されていることは、要するに人間関係において問題を起こさないことが、すなわち仁のある行為である、ということである。そして、問題の生じない人間関係は、相手が自分に望む役割を常に演じることによって維持される。子として、夫として、嫁として、当然期待されるような振る舞いをせよ、ということである。この相手が望む役割、期待される振る舞いとは、つまるところ、その時代と文化が規定する常識に依存しよう。

石門心学の教説らしく、仁の説明は心の働きからも補足される。

この無理のない心を我方で本心と申します。尤も仁と本心と、となへ所によって少しの差別はあれども、そんな事の吟味すると長うなる。唯本心は無理のないものと思召して、間違ひはござりませぬ²¹⁾。

堵庵や道二に倣って、鳩翁は心学によって至るべきものを本心という語で示している。本心とは無理のない心であり、この本心に至れば、仁が発揮され、人は友好的な人間関係を維持できる、ということであろう。逆にいうと、無理がある心の様でいると、仁が発揮されないばかりか、本人としても苦しい思いをせずにはいられないことになる。

今日各様に御一人一人御目にかゝらなくても、各様方のお心に少しも無理はござりませぬと知れます。其証拠は言ふまじき事を言ふか。すさまじき事をすると、忽ち腹の中が何とやら心わるう覚える。これ無理のない心をもつて無理をする故、心がねぢれて心悪いのでござります。是はこれ、千人萬人みな同じ事でござります²²⁾。

21) 同書、p. 27。

22) 同書、p. 27。

鳩翁のいう無理のない心とは、かつて堵庵が「有るべかり」の語で説いたものに相当しよう²³⁾。ただ、上記引用文だけでは、人は誰もが無理をしない心を自身の内に保持しているかのようにしか思われぬが、これは鳩翁の口が少々滑ったものと判断してよい。事実、『続鳩翁道話』においては、堵庵の説に近い、次のような記述がみられる。

赤子には私の心がない、至善ばかりぢや。大人には私の心が有つて、夫だけ赤子とちがひます。かるがゆゑに、孟子も、大人は、その赤子の心をうしなはずと、仰せられました。赤子の心とは只私の心のない事を申しますのぢや。私心なければ、至善ばかりで、我といふものはない、我といふものがなければ、只むかふまゝなり、向かふまゝなれば、忠孝はおのづからつとまる道理。この我なしを見つかけと、先師がたの御世話をなされるのでござります²⁴⁾。

人は誰もが生まれながらに本心を持っているが、大人になると私心に因って、それは曇らされてしまう。よって、私心を拭い去って、本心に立ち返ることこそが、心学の目標として設定されるのである。この議論は、本心とは私案がない状態を指すとした堵庵の説と、ほぼ同一と考えられる。なお、堵庵は『朝倉新話』において、私案とは次のようなものであると定義している。

此方の私案といふは安排布置の事でごぞつて、何事も此方から作意するをいひますハイ。何事も私ごとは皆私案でござるハイ²⁵⁾。

23) 手島堵庵著『論語講義』、『増補 手島堵庵全集』（清文堂・1973年）所収、p. 465。

24) 前掲『鳩翁道話』、p. 135。

25) 手島堵庵著『朝倉新話』、『増補 手島堵庵全集』所収、p. 249。

ここで何より注目すべきは、鳩翁の思想においては、私心のない本心に基づく身振りが、須らく世の常識、つまり支配的な道德規範に外れることがなく、人と人との間柄をうまく取り持つとされていることである。この問題を更に考える為に、『鳩翁道話』の冒頭に立ち返って、仁に続く義の説明部分を検討してみたい。

さて「義人路也」とは、義と言ふは無理をせぬ事なり。無理をせねば人交りは申すに及ばず、萬物と交つて宜し。故に古人「義者宜也」と仰せられました。家来としては奉公に精を出すは宜しい、嫁としては舅姑に孝行にし、夫を大切にすることが宜しいぢやござりませぬか。其外何事でも宜しいのが義でござりまする。其宜しいのが人の道ぢや²⁶⁾。

先の仁の説明と大変似ているが、仁が「無理のない」状態だとすれば、義は「無理をせぬ事」であると、鳩翁は説く。本心に従った場合は無理がない、本心に抗った場合は無理がある、と考えられるので、義は本心に従った行為、と考えることができよう²⁷⁾。理屈で考えれば、「無理のない」仁の状態に到達する為には、日々「無理をせぬ事」、すなわち義の実践が必要である、ということになるだろうか。そして、この義は同音を持つ「宜」でもあり、これは、その時々におかれた状況や状態に適切な行為を選択することが、義であることを示していると考えられよう。嫁という立場になれば、舅姑に対し、時の道德規範から考えて、良いとされる振る舞いをせねばならない。それが習慣として定着すれば、仁に至ることが可能となるのである。

これは一見整合的な議論のようにも思われそうであるが、注意深く再読すれ

26) 前掲『鳩翁道話』、p. 28。

27) 石川謙著『心学 江戸の庶民哲学』（日本経済新聞社・1964年）、pp. 172-173。

ば、結果ありきの道徳論であることにも気付かれよう。すなわち、現状を与件とするどころか、完全に認め受け容れた上で、それを心理的に正当なものとする為に組み上げられた教説である。鳩翁の思惑はどうであれ、仁と義、及び本心に関する彼の説明は、保守主義ならぬ、現状追認の思想以外、何物でもない。換言すれば、諸個人に対して強烈な禁欲主義を課し、それによって現在の社会秩序を維持、存続させようとする哲学である。その正当性の根拠を、決して固定せず、状況に応じて在り様と身振りを選択せよとする点において、巧妙な現状追認思想に仕上げられている。例えば、外部としての社会から、内部としての精神を独立させた堵庵の心学とは、全く性質を異にしているといわねばならない。

4. 鳩翁心学における社会と個人

おそらく、自分の境遇を受け容れて、それに相応しくあれとする鳩翁の教説には、梅岩の「形二由ノ心」からの影響があろう。しかし、身分／職分を手掛かりに性理に到達せんとする梅岩の心学に比べ、鳩翁のそれは余りに安易に思われる。もちろん、この安易さは、教化に重きを置いた教説の簡易化に由る部分もあるが、心と形の一致という神秘的存在論は鳩翁心学に認められず、その意味で「形二由ノ心」とは別物とされるべきであろう。すなわち、簡易化ではなく、思想の変更である。このことを考える為に、『鳩翁道話』に数多く散りばめられた挿話を幾つか検討してみたい。

昔一の谷のいくさのとき、源義経公が、丹波の三草から、摂津国へおしよせらるゝとき、山中に日を暮して、案内は知らず、武蔵坊弁慶を召して、例の大松明をともして御意なされた。弁慶畏まつて、諸軍勢に下知をつたへ、走りちつて、谷々にある家々に火をかけますれば、一面に燃上る。此火の光り

を便りとして、一の谷へ出られたと承ります。ここを能う考へて御らうじませ。是はおれが蔵ぢやの、是はおれが家ぢやの、是はおれが田地ぢやの、是はおれが娘ぢやの、どのやうにおれがおれがをかつぎあるいても、天下の乱れてあるときは、スツポンの間にも合ひませぬ。有がたい事には四海太平にをさまり、御仁政の至らぬ隈も無く、それぞれの御役人様が、夜のまもり昼のまもりと、御まもりなされてござればこそ、屋根の下に寝てはゐらるれ²⁸⁾。

挿話の展開や用い方に関しては、一流の講談師であった前歴を存分に発揮したもので、全く以って見事という他ない。この「一の谷の大松明」と呼ばれる挿話でいわれていることは、つまり戦乱などで社会が荒れてしまつては、個人が自己や、その権利を主張することはできなくなる、ということである。個人は決してそれのみで完結する存在ではなく、社会から独立した個人を想定して、思想を編み上げることは意味を持たない。確かに鳩翁のいう通りであり、社会秩序なくして、人の安定した生活は決して成り立ち得まい。

これに加えて、鳩翁の道話の中で、最もよく知られた道話の一つも検討してみたい。これは、「さざえ十六文」と呼ばれるの寓話である。

アノ栄螺と申す貝は、手丈夫な手厚い貝で、しかも丈夫な蓋がある。ソコデあの栄螺が何ぞといふと、うちから蓋をびつしやりとめて、丈夫な事ぢやと思つて居ます。鯛や鱸がうらやましがり、コレさざえや、おまへの要害は大丈夫なものぢや、うちから蓋をしめたが最後、外からは手がさせぬ、さりとては結構な身の上ぢやといへば、栄螺が髭をなで、おまへ方が其様にしてくれれば、あまり丈夫な事もない。しかしながらマアかうしてゐれば、まんざら難儀な事もないと、卑下自慢をしてゐるとき、ざつふりと音が

28) 前掲『鳩翁道話』、p. 32。

する。栄螺がうちから急に蓋をしめて、じつと考へてゐながら、今のは何であつたかしらぬ、網であらうか、釣り針であらうか、是ぢやによつて要害が常にしてないと、どうにもならぬ。鯛やすゞきは取られたかしらぬ、さても心もとない事ではある。シタガまづおれは助かつたと、兎角するうち時刻もうつり、モウよからうとそつと蓋をあげ、あたまをぬつとさし出して、そこらを見まはせば、何となう勝手が違ふやうな。よくよく見れば魚屋町の肴やの店に、此栄螺十六文と、正札付になつてゐました²⁹⁾。

石川謙は、先の「一の谷の大松明」や、上の「さざえ十六文」の挿話を、「義が個人個人の手前勝手な小理屈や意欲以上のものである点を示唆する」³⁰⁾ものと捉えているが、果たしてそうであらうか。「さざえ十六文」の寓話の後には、次のような言葉も見受けられる。

すべて是まで申すところは、金銀財宝の事ばかりではない。器量をたのみ、奉公をたのみ、智慧をたのみ、分別をたのみ、力をたのみ、格式をたのみ、これさへあれば、大丈夫ぢやと思うてござる人は、みな栄螺の御連中ぢや³¹⁾。

可能な限り自然に解せば、鳩翁は先の二つの挿話によって、社会秩序の他に換え難い価値を説き、人が往々にして物質的、精神的な私益確保に暴走することを諫めているのであろう。「さざえ十六文」は、優れた能力を持つ個人が、社会とは無縁に生命を含む自己の財産を守ろうとしても、思いもせぬところで足を掬われることを、聴衆に対し感覚的に教え込むものである。引いては、仁や義などの徳目も、決して社会を離れて独立に存在するものではなく、社会秩

29) 同書、pp. 33-34。

30) 前掲『心学 江戸の庶民哲学』、p. 180。

31) 前掲『鳩翁道話』、p. 34。

序と相即不離の関係にあることを、具体性を持たせながら伝えんとしていると捉えるべきである。

しかし、ここで注意しておく必要があるのは、鳩翁の思想において、個人の価値や多様性、自由は殆ど認められていないということである。先ほど、彼の思想においては、道德規範は社会の姿によって決定されると論じたが、ここから導かれる禁欲主義は、そのまま自身の身分と職分を甘受し、それに日々打ち込むことを奨励するものとなる。何故、眼前に広がる社会が正当なのかといえれば、それが一見平和であることが、唯一絶対の理由として挙げられる。

堯舜の御代といへば、遊んでゐても口過の出来るものゝやうに思ひ、延喜天曆の聖代といへば、只酒のんでゐるゝとおもふは、みな迷ひでござります。聖人の御代ほど、家業に精出し、正直にせねば、世わたりは出来ませぬ。お互に今日、けつこうな御代に生れ合せ、乱ばう狼藉の思ひもなく、山家の隅々、海のはしばしまで何ひとつ不自由のない、有難い御上様の御仁恵をかうむり、せめてもの冥加のために、めいめい分限をかへりみて、其止まるべき所にとゞまり、大切に御法度を守りて、少しでも御苦勞を、かけてたてまつらぬ様にいたさねば、罰があたります³²⁾。

梅岩や堵庵、道二の教説にみられる先進性は、鳩翁のそれには全く見当たらない。上に引いた言葉が伝えようとしていることは、幕藩体制に対する手放しの礼賛であり、その維持の為に力説される個人の禁欲である。個人は決して社会に優先するものではなく、それどころか、社会と同じような価値を持つものではない。

もちろん、鳩翁の思想においては、身分や職分を問い直すことは決して許さ

32) 同書、pp. 140-141。

れない。『続々鳩翁道話』には、次のように記されている。

別して大事大切にせねばならぬは、御銘々の家業ぢや。此家業は、みな是其家々の、御先祖さまや、大父祖様、親御の代から、仕来りの家業でござります。此家業をはじめめることは、一朝一夕のことぢやござりませぬ。鎧に血をつけたり、鎧の袖をしきねにしたり、又は肩に棒を置いたり、あるひは草鞋を作つたり、雨にそばぬれ、雪にうたれ、食ふものも得くはず、着る物も得着ず、口をしい目も勘忍したり、千苦萬苦して、この家業のもとを御立てなされたのぢや。その子孫として、己が勝手の氣随にまかせて、此仕事は引あはぬの、畑仕事はきらひぢやの、こんな小商ひしては、渡世になる物かなど、とかく余所外へ、目がついて、仕来りの家業が、いやになります。ソコデ百姓が商ひをし、商人が医者になり、いろいろにばけて、世間の人をたぶらかす、恐い事でござります³³⁾。

梅岩は、社会の仕組みを冷静に分析し、四民それぞれに肝要な役割があるがゆえに、家業に精励せよ、と冷静に説いた。しかし、鳩翁には、そのような社会哲学的視点は完全に欠如している。ただ、先祖代々続けてきた仕事であるから、家業は尊いと感情的に繰り返すのみである。そして、家業の変更に関しても手厳しく批判する。その理由とされるのは、「世間の人をたぶらかす」ということであり、理屈を超えたものであった。

幕藩体制を支える精神と、人の本心は同一のものであり、その根拠として挙げられるのは、生活の安定のみという有り様である。鳩翁に至って、石門心学は理性の自由を完全に手放してしまったとするのは、決して大袈裟な指摘では

33) 同書、pp.184-185。

なかろう。

5. 鳩翁心学における諦念

鳩翁の生涯について言及した際、彼の心学は「心眼によって捉えられた真なる理に基づくもの」と表現したが、これには理由がある。次の寓話は、「京の蛙と大阪の蛙」として、今もよく知られているものである³⁴⁾。

むかし京にすむ蛙が、兼て大阪を見物せんと望んで居りましたが、此春思ひ立つて、難波名所見物と出かけ、のたのたと這ひまはり、西の岡向うの明神から、西街道を山崎へ出、天王山へ登りかゝりました。又大阪にも都見物せんと思ひ立つた蛙があつて、是も西街道瀬川あくた川高槻山崎と出かけ、天王山へ登りかゝり、山の嶺で両方出会しました³⁵⁾。

天王山で出会った二匹は、ここまでの道程で相当疲れており、残された約半分の距離を旅するのは随分と大変であろうと考える。ところで、ここは天王寺の山頂であり、随分と遠くまで見渡せる場所ではないか、とも気付く。それに続くのが、次の部分である。

ナント互に足つまだて、背のびして見物したら、足の痛さも助からうと、相互に相談きはめて両方がたちあがり、足つま立て、向うをきつと見渡して、京の蛙が申しまするは、音に聞えた難波名所も、見れば京にかはりはない、

34) なお、この寓話は日本のみならず、イギリスをはじめ、ヨーロッパ諸国でも知られている。鳩翁道話の巧みさを思い知らされる事例である。例えば、前掲『心学 江戸の庶民哲学』、p176を参照。

35) 前掲『鳩翁道話』、p. 31。

術ない目をして行かうより、是からすぐに帰らうといふ。大阪の蛙も目をぱちぱちして、嘲笑うていふやう、花の都と音には聞けど、大阪に少しもちがはぬ、さらば我等も帰るべしと、双方互に色代して、又のさのさと這うて帰りました³⁶⁾。

この話の滑稽さは、蛙が背中側に目の付いた動物であることに起因する。爪先立ちになって必死に見渡した風景は、実は自分の故郷のそれに他ならない。人は目に映じたものを真実であると思いがちであるが、その目が何処に付いているかをしっかり認識することが必要である、との教訓が込められた寓話であった。加えて、物理的な目にのみ頼ることの危うさを説くものといってもよい。鳩翁が、心眼の人であるとされることが多いのは、このよく知られた寓話の影響からでもある。

実際の目ではなく、いわば心眼を確保するには、私心を捨て、本心に立ち返る必要があるということは、既にみた通りである。ここでは、他の表現によって語られたものを検討してみたい。次の言葉は、『鳩翁道話』より引いたものである。

只親を大事とおもふばかりで、我身のことはすこしもかまわぬ、これがほんの我なしと申すものぢや。此我なしといふものは、有がたいもので、身の勝手をせぬゆゑ、かへつて身の勝手になります。願はずして家の相続が出来る。御上より世間にも、孝行なものぢやと誉められ、する事なす事勝手のよい事ばかりになる。真実の身最眞身勝手がなされたくば、我なしに御なりなされませ。我なしというて体が消えて仕舞ふのではない、おれが、といふ心がなくなるのでござります³⁷⁾。

36) 同書、p. 31。

37) 同書、p. 80。

「我なし」は、明らかに私心を捨てて、本心に至った状態を指している。しかし、心学の伝統的な用語法でありながらも、鳩翁がここにおいて「我なし」という語を用いていることは、非常に示唆に富む。彼は仁を「無理のない」状態であり、義を「無理をせぬ事」とであると論じていたが、ここに個人とは「我なし」とあるという補助線を引けば、思想全体がはっきりと見渡せることになる。

改めて指摘するまでもなく、「我なし」という語は、仏教用語である。三法印の一つ、「諸法無我」に由来するものと考えて間違いない。「諸法無我」とは、全ての事物には永遠不変の実体はないとする考え方で、関係性の中にこそ正しさをみて取る、鳩翁の思想とは極めて親和性が高い。しかし、個人や徳目に内実を認めず、無我としながらも、幕藩体制は一つの実体としてしまっている辺りに、鳩翁の限界を認めねばなるまい。

また、私心を捨て去り、無我たる本心に至ったならば、次のようなことが深く理解できるようになると、彼は述べている。

心学をするは、何も外の事を、稽古するのではござりませぬ。なることはなるとしり、ならぬ事はならぬとしる、故に甚だ安楽にござります。此安楽をせうとおもへば、本心をしるが始めちや、本心をしれば、無理は出来ぬ。もし本心をしつて、無理をする人が有つたら、それは本心をしらぬのでござります³⁸⁾。

「なることはなるとしり、ならぬ事はならぬとしる」とは、具体的には、自らの社会的立場を全面的に受け容れ、家業に励むことに繋がる。社会の姿態に関して、思考したり、更には改変を試みることなど決して許されない。何故

38) 同書、p. 139。

なら、幾ら考えようが、行動しようが、社会が変化するなどということは「ならぬ事」であるがゆえ、である。鳩翁の語り口は明るいが、ここに込められたのは大きな諦念であり、行き着く先は思考停止に他ならない。竹中靖二は、この点を次のように整理、記述している。

このような考えは、「なることをなるとしり、ならぬことをならぬとしる」心学の立場から、幕藩体制の社会秩序を破ることは、「ならぬこと」であるとする、あきらめからきた帰結である。当代封建体制下で、庶民が安住の地をうるためには、各自の分に相応することをもとめ、それ以上のことを願わず、身欲のために、いたずらに、心を労することをなくする道があるのみである。それが知足安分のもつ庶民的な意味である、ということができるであろう³⁹⁾。

本論考における検討から結論付けられるのは、鳩翁に対して現在下されている低い思想的評価は、決して理由のないことではない、ということである。堵庵や道二とは異なり、鳩翁の心学には哲学的探求が殆どみられない。それでも、当時多くの聴衆を獲得したのは、最盛期に比すれば衰えながらも、石門心学という看板があったことと、彼自身に抜群の話術があったこと、この二つの理由からと推測される。また、彼が諸藩より教化を要請されたのは、彼の説くところが、幕藩体制にとって都合の良いものであった為とすべきであり、「封建支配の具に供された」⁴⁰⁾との指摘は、全く以って正しいものといえよう。

世は明治維新を眼前に控えた一大変革期に際会して、幾多の試行錯誤の方途

39) 前掲『石門心学の経済思想 増補版』、p. 667。

40) 同書、p. 666。

が繰返されつつあつた時である。庶民を現状に封じ込んで置かうとする諸藩にこそ心学は調法な道具として利用せられたが、一洗一新の意気に燃え立つ時代精神からは到底容れらるべくもなかつた。かくて百五十年伝来の心学は、梅岩の昔にかへつて社会革新の第一線に立つ教化運動にまで自らを改造するか、教化使命から目を背けて社会の進展とは無関係に、ひたすら個人個人の自己修養、安心立命の学として引籠るか、二つに一つの岐路に立つたまま明治維新を迎へたのである⁴¹⁾。

上は、石川謙が幕末期における石門心学の状況の描出したものである。もはや繰り返すまでもなく、結果として、鳩翁は「安心立命の学として引籠る」方を選択した心学者であつた。もちろん、彼の道話によって心に安寧を得た者もいたであろうが、思想内容自体は、近代性を大きく欠いたものとする他ない。個人の理性の働きを極限まで束縛し、非合理的禁欲主義を強いる思想が、近世の壁を突破することは如何にしても考えられまい。石門心学が、近世の終わりに衰退の途を歩んだことには、思想的な理由が大きく存したとすべきである。

41) 前掲『石門心学史の研究』、p. 780。

【参考文献】

- ・ Robert N. Bellah, *Tokugawa Religion-The Cultural Roots of Modern Japan*, The Free Press, 1985. R. N. ベラー著、池田昭訳『徳川時代の宗教』（岩波書店・1996年）。
- ・ 尾藤正英著『江戸時代とはなにか 日本史上の近世と近代』（岩波書店・2006年）。
- ・ 古田紹欽・今井淳編『石田梅岩の思想 「心」と「儉約」の哲学』（ぺりかん社・1979年）。
- ・ 今井淳・山本眞功編『石門心学の思想』（ぺりかん社・2006年）。
- ・ 石田梅岩著、足立栗園校訂『都鄙問答』（岩波書店・1935年）。
- ・ 石田梅岩著『石田梅岩全集（上・下）』（清文堂出版・1956年）。
- ・ 石川謙校訂『道二翁道話』（岩波書店・1935年）。
- ・ 石川謙校訂『鳩翁道話』（岩波書店・1935年）。
- ・ 石川謙校訂『松翁道話』（岩波書店・1936年）。
- ・ 石川謙著『石門心学史の研究』（岩波書店・1938年）。
- ・ 石川謙著『心学 江戸の庶民哲学』（日本経済新聞社・1964年）。
- ・ 石川謙著『石田梅岩と『都鄙問答』』（岩波書店・1968年）。
- ・ 石川謙著『増補 心学教化の本質並発達』（青史社・1982年）。
- ・ 川口浩著『江戸時代の経済思想—「経済主体」の生成—』（勁草書房・1992年）。
- ・ 子安宣邦監修『日本思想史辞典』（ぺりかん社・2001年）。
- ・ 丸山眞男著『日本政治思想史研究』（東京大学出版会・1952年）。
- ・ 丸山眞男著『日本の思想』（岩波書店・1961年）。
- ・ 丸山眞男著『丸山眞男集（全15巻）』（岩波書店・1997年）。
- ・ 丸山眞男著『忠誠と反逆 転換期日本の精神的位相』（筑摩書房・1998年）。
- ・ 丸山眞男著『丸山眞男講義録 第一冊』（東京大学出版会・1998年）。
- ・ 源了圓著『徳川合理思想の系譜』（中央公論社・1972年）。
- ・ 源了圓著『徳川思想小史』（中央公論社・1973年）。
- ・ 源了圓著『近世初期実学思想の研究』（創文社・1980年）。
- ・ 森田健司「江戸後期における陽明学と武士道の連関—大塩中斎・山田方谷・河井継之助—」、『大阪学院大学経済論集 第22巻第2号』（大阪学院大学・2008年）所収。
- ・ 森田健司「石田梅岩『都鄙問答』における経済倫理思想—その現代的可能性と限界—」、『大阪学院大学経済論集 第23巻第1号』（大阪学院大学・2009年）所収。
- ・ 森田健司「石田梅岩『儉約齊家論』における道德哲学の再検討—『都鄙問答』との比較を通して—」、『大阪学院大学経済論集 第23巻第2号』（大阪学院大学・2009年）所収。
- ・ 森田健司「石門心学史における手島堵庵の思想的位相—外形的制約からの決別と『本心』—」、『大阪学院大学経済論集 第24巻第1号』（大阪学院大学・2010年）所収。

- ・ 森田健司「中沢道二の「道話」哲学にみる存在論的転回—石門心学隆盛の時代とその真因—」、『大阪学院大学経済論集 第24巻第2号』（大阪学院大学・2010年）所収。
- ・ 奈良本辰也『町人の実力 日本の歴史17』（中央公論新社・1974年）。
- ・ 小川晴久編著『実心実学の発見 いま甦る江戸期の思想』（論創社・2006年）。
- ・ 相良亨著『相良亨著作集1 日本の儒教Ⅰ』（ぺりかん社・1992年）。
- ・ 相良亨著『相良亨著作集2 日本の儒教Ⅱ』（ぺりかん社・1996年）。
- ・ Janine Anderson Sawada, *Confucian Values and Popular Zen: Sekimon Shingaku in Eighteenth-Century Japan*, University of Hawaii Press, 1993.
- ・ 柴田寅三郎編『鳩翁遺稿』（刀江書院・1929年）。
- ・ 柴田実著『石田梅岩』（吉川弘文館・1962年）。
- ・ 柴田実校注『日本思想大系42 石門心学』（岩波書店・1971年）。
- ・ 柴田実監修・森田芳雄著『儉約齊家論のすすめ 石田梅岩が求めた商人道の原点』（河出書房新社・1991年）。
- ・ Tessa Morris-Suzuki, *A History of Japanese Economic Thought*, 1989. テッサ・モーリス＝スズキ著、藤井隆至訳『日本の経済思想—江戸期から現代まで—』（岩波書店・1991年）。
- ・ 田原嗣郎著『徳川思想史研究』（未来社・1967年）。
- ・ 竹中靖一著『石門心学の経済思想 増補版』（ミネルヴァ書房・1972年）。
- ・ 手島堵庵著・白石正邦編『手島堵庵心学集』（岩波書店・1934年）。
- ・ 手島堵庵著・柴田実編『増補 手島堵庵全集』（清文堂・1973年）。
- ・ 山田芳則著『幕末・明治期の儒学思想の変遷』（思文閣出版・1998年）。
- ・ 由井常彦著『都鄙問答 経営の道と心』（日本経済新聞社・2007年）。

Kyuo Shibata's Stoic Shingaku in his "Dowa"s

— The Philosophical Changes in Sekimon Shingaku and the Decline of the Shingaku —

Kenji Morita

ABSTRACT

Sekimon Shingaku spread to the whole country and became very popular in early modern age, but it became not to be recognized as a popular philosophy together with the closing of Edo era. Why did Sekimon Shingaku share Edo era's fate? What is the philosophical reason for the decline of Sekimon Shingaku? In this thesis we will argue about Kyuo Shibata's thought referring to the history of Sekimon Shingaku.

It is also admitted generally that Kyuo Shibata who was also an expert of a lecturer refined the "Dowa" that was already completed by Doni Nakazawa. To put it briefly, Kyuo's philosophy found in his "Dowa" is nothing but stoicism. Sekimon Shingaku founded by Baigan Ishida had the strong tendency toward stoicism since its beginning, but the biggest problem of Kyuo's stoicism was that it could restrict the action caused by human's reason. Sekimon Shingaku that was simplified by Kyuo, came to deprive of freedom and ratified any political system should decline with the falling down of the early modern age.

Keyword : economic ethics; Sekimon Shingaku; social thought.

JEL Classification Numbers : B19; Z12.